

研究課題	教員ネットワークの形成と双方向型情報共有による子どもアシストシステムの活用
副題	～ICTを活用した教員サポートで、読み書きに困難がある児童に必要な支援を届ける～
キーワード	
学校/団体名	守口 Resource room 研究会
所在地	〒570-0012 大阪府守口市大久保町2丁目17-26
ホームページ	

1. 研究の背景

2022年度に守口市内の通級指導担当者グループを立ち上げ、定時のオンラインミーティングや対面研修・オンライン研修などを実施した。2023年度も小学校、義務教育学校前期課程で通級指導教室の新設設置や担当者交代が見込まれたことから、通級指導経験がある担当者や元担当者を中心にグループを継続し、通級指導担当者の Resource となる活動を行うこととした。また、学校規模に対して特別支援学級の設置数が大変多い現状がある。通級設置校がこれまで少なかった経緯もあり、読み書きに困難のある児童が特別支援学級にも一定数含まれている。通級指導担当者間でも、そのことは度々話題に上ってはいた。しかし、校内でたった一人しかいない通級指導担当教員の努力だけでは、読み書きの困難という視点に立った支援の方法を提案するという事は、非常に難しかった。そこで本グループを活用しながら、彼らの教育的ニーズに合ったアセスメントや指導の方法が特別支援学級の担任に伝われば、自校の通級指導の担当者と連携し、より多くの児童に必要な支援が届くのではないかと考え、本研究に取り組むに至った。

2. 研究の目的

通級指導担当教員には、的確に目標を立て、児童の願いに寄り添った指導を週に数時間という非常に限られた時間で行うことが求められる。そこで本研究では、特別支援教育士、公認心理師、臨床発達心理士などの資格を有する教員や指導経験のある教員が中心となり、オンラインミーティングで取り扱う内容の企画や指導法の検討を行うことにより、通級指導担当教員が教員ネットワークを活用しながら指導する力を高め、多くの児童に支援を届けるようになることを目的とする。具体的には①アセスメントと連動した目標設定や指導内容を精選する力②クラウド上で指導教材や支援の方法、GIGA 端末を活用した教材作成の方法などを共有し、活用する力。③自校内にいる読み書きに困難がある児童のアセスメントを行い、支援教育コーディネーターと連携しながら校内での指導について提案する力の三つが必要であると考え。

これら三つの力を発揮するには、特別支援教育に関わる教員も共に学んでいく必要がある。本グループを活用しながら共に学ぶことで、実際にどのような情報が活用され、どの程度の児童の指導に反映されていくのか検証する。尚、本研究会では、クラウドに残すファイルには個人の特定につながる記載はしないなど、個人情報の保護に留意しながら指導法の検討を行った。

3. 研究の経過

取り組み内容	
月	守口 Resource room 研究会
4月	通級指導担当者グループ作成・グループの概要説明（オンライン） 機器の設定と配布
5月	オンラインミーティング開始第1期 ①多層指導モデル MIM について ②指導事例のまとめ方
6月	③新しく担当になった先生方からの質問への回答 ④⑤事例検討 ⑥MIM を使った取り組みについて
7月	⑦⑧事例検討
8月	対面研修 講師：井上賞子先生（安来市立荒島小学校）
9月	⑨⑩⑪事例検討 ⑫教育相談事例の検討
10月	⑬アセスメントと指導について オンラインミーティング第2期 ①②事例検討 ③読み書きのアセスメントと指導について
11月	④⑤⑥小学校事例検討 教材作成用アプリ配布 ⑦ICT を活用した指導教材や情報発信について ○オンライン研修 講師：薄 洋介先生（江戸川区立大杉小学校 ことばの教室）
12月	⑧事例検討
1月	第3期 指導法・指導教材について ①漢字の指導
2月	②数量や計算・図形の指導・英語の指導 ③対人スキルやセルフコントロールの指導 ④通級指導に至るまでの校内システム 北河内地区支援教育研修会で実践発表
3月	1年間のふり返りと Teams 内ファイル整理

4. 代表的な実践

本研究会の参加メンバーには担当者交代や新設設置のため新しく通級指導担当となった教員が5名含まれる。また、特別支援教育に関わる研究会には特別支援学級担任が多く在籍するが、通級指導担当教員、支援教育コーディネーターや通常の学級の担任なども含まれており、学校ごとに参加している教員の人数は異なるが、毎回40名程度の教員が参加している。

1) Resource の活用と校内サポートシステムの構築

A校の事例

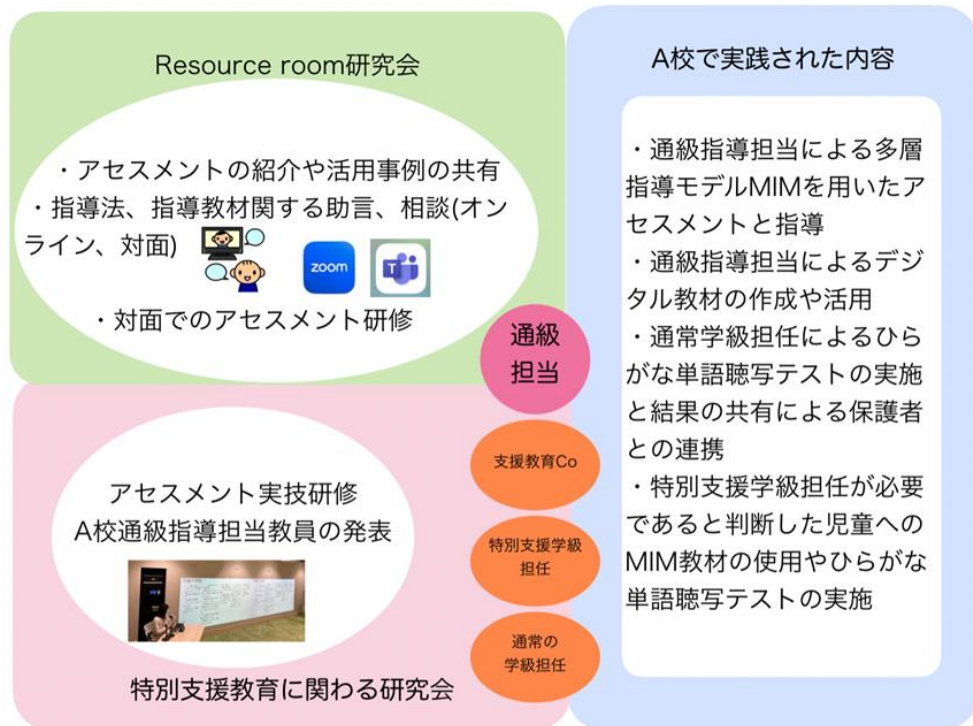


図1 A校の通級指導担当教員を中心とする Resource の活用と実践

A校は今年度通級指導教室が新設設置されたことから、ほぼ欠かさずオンラインミーティングに参加した。また、対応に困った場合はすぐに Teams で連絡を取り合い、オンラインで相談をするなど、できることから素早く実践に取り組んだ。さらに、特別支援教育に関わる研究会に参加している教員も複数名いたことから、通常の学級や特別支援学級との連携をはじめ、希望者のみ参加としていたオンラインの研修にも、複数名の教員が参加した。A校では、通級指導担当教員を中心に、学校として読み書きに困難がある児童の早期発見や指導にどう向き合うか、1年目から積極的に考え取り組んでいる。

2) 読み書きが苦手な児童の ICT 活用事例

①iPad アプリを用いた指導



写真1 児童のニーズに合ったアプリを使用して学習する様子

教職員用 iPad が昨年度末に配布されたが、アプリの使用に制限があることは児童用端末と同様であり、通級指導においても児童の指導に必要なアプリを探すことはできない。助成金で購入した iPad を通級指導担当教員に配布し、有料のアプリを購入しながら各校で指導を行っている。また、児童が試してみた結果、指導に有効である無料アプリについては申請をし、児童の GIGA 端末でも使えるようにしている。

②GIGA 端末の活用



写真2 B校の放課後教室の様子

学年全体に実施した読み書きに関するアセスメントの結果、早期のサポートが必要な児童には、各校で放課後教室を実施している。2年間の活動の結果、放課後教室の内容を補習的な内容から、アセスメントに基づいた読み書きに関する内容へと切り替えた学校が増えた。写真は早く正確に読む練習をしている B 校の放課後教室の様子である。児童は問題を GIGA 端末で受け取り、各自練習した後に学生ボランティアや教員の前で読む。合格すれば次の問題を児童用端末に送るという方法で行った。読みの流暢性の改善が見られなかった児童にはさらに詳しいアセスメントを行い、保護者と教育相談を行った後に、合理的配慮や通級の利用を検討している。写真にはないが、音声教材の申請を行い GIGA 端末で使用できるようにもしている。

5. 研究の成果

1) 通級グループ内での成果

①オンラインミーティングで得られた情報の活用

通級経験年数	教員が自校の指導で取り入れた内容
1年目	家庭で取り組むための単語帳アプリ・触感覚で分かる漢字教材
1年目	算数スクリーニング・ファイル共有された教材の活用・Mind Map
1年目	ひらがなの学習会を開始・紹介されたアナログ教材の使用
1年目	参考書籍を購入し、実践
1年目	参考書籍を購入し、実践
1年目	算数スクリーニング・アナログ教材
2年目	LDI-Rを使ったアセスメント
2年目	プレゼンテーションアプリを使った教材作成
4年目	アセスメントと指導の連動性の確認
元担当教員	算数アセスメント、アプリを使った読み教材作成

教員により活用できた情報は異なるが、標準化されたアセスメントを用いて事例を整理し、児童の実態を共有した後、それぞれの教員が事例に関して助言を行っている。オンラインで実施していることから、その事例に関して参考となる書籍や教材を自分の教室からその場で紹介できる。そのため毎回何らかの新しい情報が共有され、必要教材の準備から使用開始までの期間が短くなるという利点がある。また、オンラインで後日詳しく紹介したり、実物確認のため来校したりする場合もある。

②校内支援やICT活用の話題提供を受けて実践したこと

通級経験年数	教員が自校の指導で取り入れた内容
1年目	多層指導モデル MIM を1～3年生で実施。指導法を低学年担任に伝え、クラスで特殊音節の練習練習プリントに取り組んだ。
1年目	放課後の読み書きに関する学習会の企画。
1年目	カード教材をプレゼンテーションアプリで作成し、児童と共有
1年目	児童に合ったアプリを使用した指導
1年目	低学年の担任と連携し、MIMの教材に朝の学習で取り組んでいる
1年目	アプリ Canva を活用した教材作成
2年目	児童の理解が深まる ICT 活用、校内でも共有
2年目	アプリ DropTap のイラストを使用した教材作り
4年目	GIGA 端末での読み上げやルビを設定し、児童が自分で学べる環境設定
元担当者	アプリ Canva を使用した共同作業

初めて通級を経験する教員は、校内体制の構築の中心的担い手となっているため、ICTに関する回答が少なかったが、アンケートの実施後、教材作成用有料アプリを助成金で購入したことから、今後は作成方法や作成した教材の紹介などが話題として上ることが予測される。また、児童

と教材を共有する手段として GIGA 端末を使用すれば、家庭に持ち帰り使用することができる。さらには、児童が自分で作成や設定ができるように指導することも、昨年度から本研究会に所属する教員は日常的に行っている。

2) 特別支援教育に関わる研究会での成果

2023 年度に実施した研修について、その内容を自校で活用することができたかについてアンケート調査を実施した。(回答数紙面での回答 31 名、Forms への回答 7 名)

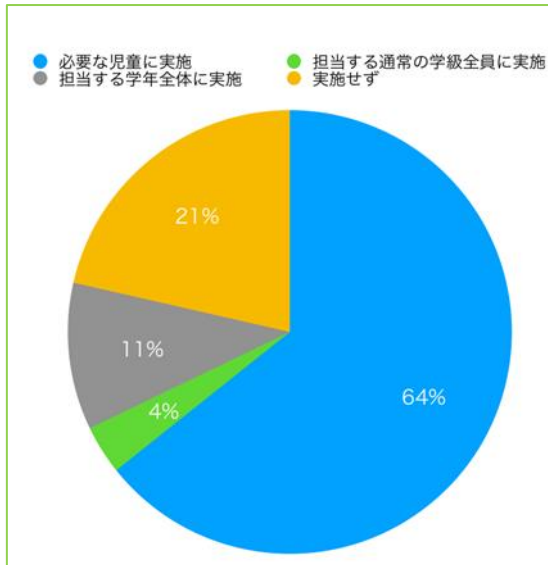


図 2 教員の読み書きアセスメントの実施状況

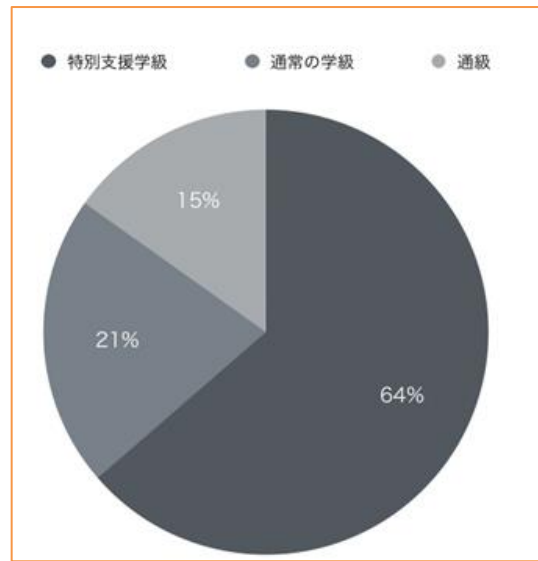


図 3 研修内容を指導に反映できた教員の担当学級

図 2 は、アセスメントの実技研修に参加した教員が、自校で実際に実施したかについて回答した割合を示している。8 割近くの教員が実施したということが分かる。特別支援学級の教員でも、障害種別ごとに児童の支援ニーズが異なるため、全ての学校で実施されたわけではない。しかし、特別支援学級や通級指導教室においては、教員が必要であると判断した児童に実施したとの回答が約半数であった。また、通常の学級担任がクラス児童全員に実施した、または学年全体で実施したとの回答もあり、アンケートに回答した教員の 6 割がアセスメントを実施したという結果になった。

さらに、1 年間で行った研修内容が、読み書きに困難がある児童の指導に反映できたと回答した事例の合計は 170 名となった。先述の A 校のように学級や学年でのサポートを、通級指導教員を中心に行うという体制を作る学校が徐々に増えてきている。また図 3 に示すように、1 学級当たりの人数は少なくとも、特別支援学級でもアセスメントが実施され、読み書きに困難がある児童の指導について研修した内容が反映されていった。

6. 今後の課題・展望

通級指導担当教員に実施したアンケートにおいて、①アセスメントと連動した目標設定や指

導内容を精選することは、オンラインミーティングで事例を発表したり、指導法を検討したりする中で、できるようになってきたと全ての教員が回答した。また、②クラウド上で指導教材や支援の方法、GIGA 端末を活用した教材作成の方法を共有し活用することも日常的に行っている。③自校内の児童のアセスメントと支援教育コーディネーターとの連携や校内での支援については、次年度新設設置が見込まれる学校でも、既に巡回指導を行っている通級指導担当教員が中心となり、実施している。

来年度、新設設置が行われれば、市内全ての小学校、義務教育学校前期課程に通級指導教室が設置されることとなる。対面でのやり取りが平常に戻ったことから、逆にオンラインでミーティングを開催することが難しいと感じることもある。そのため、2年間でまとめた内容を Teams 内に分かりやすくまとめるという作業を行っている。現在の最新の情報はそこに集約されるが、新しい情報に置き換えていく必要がある。次年度の通級指導の担当者も Team に追加し、引き続き活用していきたい。また、特別支援に関わる研究会に所属するメンバーから次の担い手が選ばれることも考えられる。定時ミーティングを毎週行うことは困難であるが、要望があればいつでもミーティングやオンライン研修が実施できる体制は維持していく。そして今年度は並行して特別支援教育に関するグループの研修や内容構成の変更を行ってきた。特別支援教育に関するグループでも、近い将来オンラインでつながる、相談し合える場を作ることができれば、さらに読み書きに困難がある児童に必要な支援がより届くようになるのではないかと考えている。

7. おわりに

本グループは3年前のコロナ禍に、教材配布以外に指導するすべがなかった苦い経験から、まずは通級指導担当教員がオンラインで情報共有できるグループを作るという構想を当時の担当者3名で話し合ったところから始まった。今年度末で3名とも元担当者となる。次の担い手と素早くつながり、通級指導担当者同士で情報共有することで、児童により早く支援が届くシステムモデルを構築し、さらに特別支援教育にかかわる多くの先生方にも内容の一部を活用し、連携し、広げられる可能性を見出すことができた。

読み書きに困難がある児童の指導に ICT を活用することが不可欠であった本グループを2年間にわたって助成して頂き、必要な機器を購入し、各校で使用できるようになりました。また、オンラインサポートでご指導くださった先生方や他校の先生の貴重なご意見を伺いながら活動を修正できました。皆様に感謝申し上げます。